

保育者による省察と実践力の認知との関連 — クラスター分析を用いたグループ間の比較 —

上山瑠津子¹・杉村伸一郎²

Relationships between nursery teachers' reflection and perception of practical skills

— Comparison of reflection pattern by cluster analysis —

Rutsuko UEYAMA¹・Shinichiro SUGIMURA²

Abstract: This study aimed to reveal the difference between reflection patterns of nursery teachers by cluster analysis, and examined the relationships between reflection patterns and the teachers' perception of practical skills. As reflection is an important cognitive skill in early childhood education and care, analysis that considers both individual differences and group characteristics is necessary. A questionnaire survey was conducted among 434 nursery teachers. Cluster analysis revealed 7 subtypes of reflection pattern. And the 7 subtypes were categorized into three groups : low, middle, and high. On comparing the reflection patterns in the three groups, even if the frequency of the reflection was at the same level, characteristics regarding targets or the level of reflection were different. In relationships between the perception of practical skills and reflection, differences in the target or level of reflection were associated with behavioral aspects regarding how one reacts to children. We concluded that in conferences and during training it may be possible to examine specific teaching efforts according to individuals' reflection patterns.

Key words: practical skills, nursery teachers, reflection, cluster analysis.

問題と目的

保育実践において省察は必要不可欠な専門性の一つであると考えられている(秋田, 2000)。これまでに省察に関する概念モデルや理論的枠組みが検討され(Schön, 1983 佐藤・秋田監訳 2001; Korthagen, 1985 武田監訳 2010), 保育実践の中での省察の位置づけを明確にしてきたといえる。これらの概念モデルや理論的枠組みにより, 保育実践の中で保育者の省察はどのように機能しているのか, 省察はどのような段階や過程を経ていくのかという側面が捉えられてきたが, 省察の個人差はほとんど考慮されていない。また, 保育実践において省察を促進する取

組みとして, 園内研修や保育カンファレンスが盛んに行われてきた(木全, 2008; 溝口, 2009; 岡花他, 2009)。しかしながら, 協働による省察では, 実施された取組みを通してどのような振り返りをしたかを省察促進の指標としており, 保育者の属性や保育経験などによって異なる省察の特徴は十分に考慮されていない。

以上のように, 先行研究では, 省察の個人差に関する検討がほとんど行われてこなかったが, 保育経験などにより省察の内容が異なることを示した研究はいくつかある。例えば, 山川(2009)は, 新人保育者とベテラン保育者(15年目)各1名を比較した結果, <自分自身>を振り返る際に, 新人保育者は, 保育の問題を自身のパーソナリティの問題が関連するものと捉え, ネガティブな内容を多く語る一方, ベテラ

1 広島大学大学院教育学研究科博士課程後期
2 広島大学大学院教育学研究科附属幼年教育研究施設

ン保育者は、保育における失敗でさえもネガティブなものとして捉える様子はなく、失敗を通して保育者自身も成長するものと客観的に捉えていた。このように保育経験の違いにより、＜自分自身＞について振り返るといふ省察の対象は同じであっても、対象に対してどのような捉え方をするのか、つまり振り返り方が異なることが示された。

また、Hornáčková, Syslová, Herciková, & Holubářová (2014) は、保育者養成段階での教育歴の違い（中等教育：Secondary education と大学教育：University education）が、保育者になってからの省察スキルに関連しているかを検討している。保育経験5～10年の保育者8名に対してビデオ視聴による半構造化インタビューを行った結果、中等教育の保育者は、自分自身の特性に焦点化した省察を行い、改善点に関する質問に対しては、自分自身の実践に満足し、特に変える必要がないと回答していた。一方、大学教育の保育者は、子どもの行動を記述し、子どもの活動の条件や組織化の改善の可能性について振り返った。このように、教育歴の違いが省察の対象の違いに関連していることから、彼らは養成段階の省察スキルの重要性について言及している。

以上の研究から、保育者により省察の内容等が異なることが示唆される。しかしながら、これらの研究は、保育経験や教育経験による省察の違いに焦点化しており、省察の対象間、例えば、子どもと保育者自身という省察の対象がどのように関連しているのかについては明らかにしていない。

この点について、省察の対象を複数想定し、その相互の関連を量的に検討した研究がある。杉村・朴・若林（2009）は、省察の対象を「保育者自身に関する省察」「子どもに関する省察」「他者を通じた省察」の3つに区別すると同時に、省察のレベルを3層設定したモデルに基づき尺度開発を行っている。探索的因子分析の結果、保育者自身に関する省察では「自己考慮」「自己注意」、子どもに関する省察では「子ども分析」「子ども察知」、他者を通じた省察では「他者情報利用」「他者情報収集」と、各対象において2因子構造が妥当であると判断され、省察尺度はこの6下位尺度から構成された。そして、共分散構造分析を行った結果、省察レベルの低い「自己注意」「子ども察知」「他者情報収集」から、省察レベルの高い「自己考慮」「子ども分析」「他

者情報利用」への方向にパスを描いた方がモデルの適合度は高いことが示された。

このように、杉村・朴・若林（2009）は、省察の構造を示そうとしている。しかし、今後の課題でも述べられているように、各保育者は6種類の省察をどの程度行っているのか、という省察パターンや個人差の分析に関しては検討していない。また、上山・杉村（印刷中）は、私立保育園保育士を対象に質問紙調査を行い、保育者による実践力の認知と保育経験および省察との関連を量的に検討した結果、経験年数から実践力への影響では、部分的に省察が媒介していることが示唆された。しかし、各保育者の省察パターンや特徴まで検討していない。

そこで本研究では、保育者の省察について個人差を考慮し検討することを目的にする。第一に、省察の6下位尺度を用いてクラスター分析を行う。クラスター分析とは、与えられた個々のデータから似たもの同士を集めて、いくつかのクラスターに分類することで、データの特徴を見るという統計的分析手法である。本研究では、クラスター分析により省察パターンを分類する。第二に、省察パターンの違いが、実践力にどのように関連しているのかを検討する。これにより具体的な省察研究への示唆が得られるだろう。

方 法

調査対象者

調査を2回実施し、1回目281名、2回目239名、合計520名より回答を得た。本研究では、2つの尺度に全項目回答したものを有効回答とした。有効回答率は83.4%、有効回答数は434名となった。2回の調査は、対象者が異なっていたため回答に重複はなかった。

調査時期

2012月11月および2013年10月に実施した。

調査方法

私立保育園保育士対象の研修後、集団質問紙調査を実施し、その場で回収した。回答に対する研修の影響については、調査内容が日常の保育実践を想起しながら回答する内容であったことから、研修内容の回答への直接的な影響はほとんどないと考えられる。保育者の基本属性について、年齢、性別、保有する免許数、現在の園での在籍年数、現在担当している園児の年齢、勤務年数の回答を求めた。保育経験年数については、勤務年数（総延べ年数）を尋ねることで、

産休・育児休暇を含まない経験年数を回答してもらった。回答が数ヶ月単位で記入の場合でも、年単位の経験年数を採用した。調査用紙の表紙には、調査目的に加え、調査協力者の回答への自由、回答中断の権利、個人情報取り扱いなど、調査倫理に関わる注意事項を明記した。

調査内容

実践力尺度 木村・橋川(2008)の作成した保育者実践力尺度が大学教員を対象にしていたことから、上山・杉村(印刷中)は、尺度の利用可能性の確認のため現役保育者対象に日常の実践でどの程度行っているかを尋ね、探索的因子分析により因子構造を確認した。その結果、モデルの適合度指標は、一定水準の許容範囲内であった。従って、現役の保育者を対象に行った保育実践力尺度は、「生活環境の理解力」、「子ども理解に基づく関わり力」、「環境構成力」の3つの概念から構成されていると考えることが妥当であると判断され、本研究においても、この3因子構造を採用した。

保育者実践力尺度は、26項目から成り、本研究では、日常の保育者自身の実践に関して、どの程度あてはまるかという質問に対して「全く当てはまらない(1点)」から「とてもあてはまる(4点)」までの4件法で回答を求めた。

省察尺度 杉村・朴・若林(2009)が作成した保育者の省察尺度を用いた。この尺度は、保育についてどの程度省察するかを測定する33項目から成り、評定は「まれにある(1点)」から「いつもある(5点)」の5件法を用いた。尺度は省察の内容により6つの下位尺度に分かれ、「保育者自身に関する省察」「子どもに関する省察」「他者を通した省察」に関してそれぞれ2つの尺度から構成されている。

「保育者自身に関する省察」は、実践中の自己の態度や行動に対する注意や意識に関するもので、「自己考慮」(6項目:「子どもと話した後、自分の言い方が適切かどうか考えることがある」等)と「自己注意」(5項目:「子どもと話すとき、自分の態度に注意を向けることがある」等)から構成されている。

「子どもに関する省察」は、実践中の子どもの行動や態度に対する注意や予想に関するもので、「子ども分析」(7項目:「子どものこれからの成長について考えることがある」等)と「子ども察知」(4項目:「子どもと一緒にいるとき、子どもの行動に注意を向けることがある」等)から構成されている。

「他者を通した省察」は、他のクラスの子どもや他の保育者の様子に注意を向け見たりすることに関するもので、「他者情報利用」(6項目:「他の人と話をして、自分の保育の方針を改めることがある」等)と「他者情報収集」(5項目:「他のクラスの子どもが保育者とかかわる様子を注意深く見ることがある」等)から構成されている。

分析対象と方法

本研究では、データ数が十分にあったので、2つの尺度の全項目に回答した434名(平均保育年数12.1年, $SD = 10.1$), うち男性15名(平均保育年数9.7年, $SD = 8.7$), 女性413名(平均保育年数12.3年, $SD = 10.1$), 不明6名(平均保育年数10.5年, $SD = 7.9$)を分析対象とした。保育経験年数については、1-4年は、133名(平均保育年数2.4年, $SD = 1.1$), 5-10年は、109名(平均保育年数7.3年, $SD = 1.8$), 11-20年は、99名(平均保育年数15.3年, $SD = 3.0$), 21年以上は、93名(平均保育年数28.4年, $SD = 4.4$)

Table 1 各クラスターにおける省察下位尺度得点の平均とSDならびに多重比較の結果

クラスター(人数)	I (78)	II (99)	III (7)	IV (132)	V (27)	VI (49)	VII (42)	多重比較の結果 (5%水準)
自己考慮	3.57 (0.33)	2.88 (0.38)	1.62 (0.18)	4.05 (0.37)	4.73 (0.25)	3.26 (0.36)	3.69 (0.34)	I・VII以外有意
自己注意	3.33 (0.30)	2.77 (0.43)	1.83 (0.13)	4.09 (0.32)	4.76 (0.22)	3.51 (0.32)	3.67 (0.36)	I・VI, VI・VII以外有意
子ども分析	3.60 (0.26)	2.96 (0.39)	1.61 (0.32)	4.18 (0.29)	4.78 (0.25)	3.65 (0.39)	3.76 (0.34)	I・VI・VII, VI・VII以外有意
子ども察知	3.58 (0.42)	3.55 (0.56)	1.68 (0.37)	4.38 (0.37)	4.87 (0.20)	4.52 (0.39)	4.33 (0.28)	II・I, I・IV・VI, VII・IV・VI, IV・VI以外有意
他者情報利用	3.67 (0.29)	3.00 (0.39)	1.76 (0.39)	4.04 (0.46)	4.65 (0.37)	3.49 (0.56)	3.55 (0.41)	VI・VII・I, VII・I以外有意
他者情報収集	3.35 (0.51)	2.82 (0.49)	1.63 (0.48)	3.97 (0.50)	4.81 (0.21)	3.81 (0.32)	2.80 (0.46)	VII・II, VI・IV以外有意
省察合計	3.52 (0.17)	3.00 (0.25)	1.69 (0.23)	4.12 (0.18)	4.77 (0.14)	3.71 (0.21)	3.63 (0.19)	I・VII, VII・VI以外有意

各尺度得点は項目数で割った値を示した。

Table 2 各クラスターにおける省察下位尺度得点の平均ならびに全体平均との差

クラスター(人数)	I (78)		II (99)		III (7)		IV (132)		V (27)		VI (49)		VII (42)		全体平均
	平均	差	平均	差	平均	差	平均	差	平均	差	平均	差	平均	差	
自己考慮	3.57	-0.01	2.88	-0.69	1.62	-1.96	4.05	0.47	4.73	1.15	3.26	-0.32	3.69	0.11	3.58
自己注意	3.33	-0.22	2.77	-0.78	1.83	-1.72	4.09	0.54	4.76	1.21	3.51	-0.04	3.67	0.12	3.55
子ども分析	3.60	-0.09	2.96	-0.73	1.61	-2.08	4.18	0.49	4.78	1.08	3.65	-0.04	3.76	0.06	3.69
子ども察知	3.58	-0.46	3.55	-0.50	1.68	-2.36	4.38	0.33	4.87	0.83	4.52	0.48	4.33	0.28	4.04
他者情報利用	3.67	0.04	3.00	-0.63	1.76	-1.86	4.04	0.41	4.65	1.03	3.49	-0.14	3.55	-0.08	3.63
他者情報収集	3.35	-0.13	2.82	-0.66	1.63	-1.85	3.97	0.49	4.81	1.33	3.81	0.33	2.80	-0.68	3.48
群差の平均	中	-0.14	低	-0.67	低	-1.97	高	0.46	高	1.10	中	0.04	中	-0.03	

であった。統計分析には、SPSS statistics 22.0, Amos 22.0 (IBM 社) を用いた。

結果

省察の下位尺度得点によるクラスター分析

省察尺度の「自己考慮」「自己注意」「子ども分析」「子ども察知」「他者情報利用」「他者情報収集」のZ得点を用いて、距離測度に平方ユークリッド距離、クラスタリング法にWard法を用い、クラスター分析を行い7つのクラスターを得た。第Iクラスターには78名、第IIクラスターには99名、第IIIクラスターには7名、第IVクラスターには132名、第Vクラスターには27名、第VIクラスターには49名、第VIIクラスターには42名が含まれていた。

次に、得られた7つのクラスターを独立変数、「自己考慮」「自己注意」「子ども分析」「子ども察知」「他者情報利用」「他者情報収集」を従属変数にした一要因分散分析を行った。その結果、全てにおいて10%水準で有意な群間差が見られた(自己考慮： $F(6,427) = 189.66$, 自己注意： $F(6,427) = 228.24$, 子ども分析： $F(6,427) = 226.80$, 子ども察知： $F(6,427) = 119.81$, 他者情報利用： $F(6,427) = 106.59$, 他者情報収集： $F(6,427) = 130.59$, 省察合計： $F(6,427) = 554.36$)。各群の平均値と標準偏差ならびにTukeyのHSD法(5%水準)による多重比較を行った結果をTable 1に示す。なお、各クラスターの保育経験年数は、第Iクラスターから順に、9.33年、10.11年、10.29年、13.87年、18.22年、13.55年、11.71年であった。また、各クラスターの現園での在職年数は、第Iクラスターから順に、4.67年、4.98年、9.40年、5.41年、6.00年、7.65年、5.74年であった。

クラスター間の相対的な比較から、各クラスターの特徴を捉えるために、省察6下位尺度の平均値をもとに、7つのクラスターを省察低・中・高群の3群に分けた。省察低群は、6下位

尺度の平均値がほぼ1.00~3.00の範囲だった第IIクラスターと第IIIクラスターが含まれた。省察中群は、6下位尺度の平均値がほぼ3.30~4.00の範囲だった第Iクラスターと第VIクラスターと第VIIクラスターが含まれた。省察高群は、6下位尺度の平均値がほぼ4.00以上の範囲だった第IVクラスターと第Vクラスターが含まれた。

さらに、各クラスター内での省察6下位尺度の偏りを捉えるために、全クラスターの省察6下位尺度得点の平均と、各クラスターの省察6下位尺度得点との差を算出した(Table 2)。これらの得点に関する情報から、各クラスターの特徴を以下のように捉え、命名した。

第Iクラスターは、省察中群に分類された。さらに、クラスター内での省察6下位尺度の得点を見ると、子ども察知で全体平均との差がマイナスに最も大きかった。そこで、「省察中・子ども察知低群」と命名した。第Iクラスターは、全体平均との差において、子ども察知に続いて自己注意で差が大きいことから、知覚(気づき)レベルの1次的省察をあまり行っていない群であると考えられる。

第IIクラスターは、省察低群に分類された。さらに、クラスター内での省察6下位尺度の得点を見ると、自己注意で全体平均の差がマイナスに大きかった。そこで、「省察低・自己注意低群」と命名した。このことから、第IIクラスターは、自分の態度や行動に注意を向けにくい傾向にあると考えられる。

第IIIクラスターは、省察低群に分類された。さらに、クラスター内での省察6下位尺度の得点を見ると、子ども分析と子ども察知で全体平均との差がマイナスに大きかった。そこで、「省察低・子ども全体低群」と命名した。第IIIクラスターは、全7クラスターの中で最も省察得点の低い群であるが、保育経験年数が他群(例えば、第Iクラスターや第IIクラスター)よりも長い。このことから、経験年数に関係なく元々

に省察を行いにくい群であると考えられる。

第Ⅳクラスターは、省察高群に分類された。さらに、クラスター内での省察6下位尺度の得点を見ると、同じ省察高群の第Ⅴクラスターと比べると全体平均との差は低いが、クラスター内では全体平均との差はプラスであった。そこで、「省察高・全体低群」と命名した。

第Ⅴクラスターは、省察高群に分類された。さらに、クラスター内での省察6下位尺度の得点では、全てにおいて全体平均との差が1点近くプラスに大きかった。そこで、「省察高・全体高群」と命名した。第Ⅴクラスターは、全7クラスターの中で最も省察得点の高い群であり、かつ保育経験年数も最も長い群であった。このことから、第Ⅴクラスターは、経験年数と共に省察をよく行ってきた保育者または、省察を行うことで経験を積み重ねてきた保育者から構成されていると考えられる。

第Ⅵクラスターは、省察中群に分類された。さらに、クラスター内での省察6下位尺度の得点を見ると、全体平均との差が最も大きいのは、子ども察知でプラスに差があった。そこで、「省察中・子ども察知高群」と命名した。また、第Ⅵクラスターは、省察中群の中で他者情報収集の全体平均との差がプラス方向に最も大きい。このことから、省察中群の中でも、子どもの行動や他の保育者と子どもとの関わりによく注意を向ける傾向があると考えられる。

第Ⅶクラスターは、省察中群に分類された。さらに、クラスター内での省察6下位尺度の得点を見ると、全体平均との差が最も大きいのは、他者情報収集であった。そこで、「省察中・他者情報収集低群」と命名した。第Ⅶクラスターは、全7クラスターの中でも他者情報収集に関して全体平均との差が最も大きいことから、他の保育者と子どもどのように関わっているかにあまり注意を向けにくい傾向があると考えられる。

各クラスターにおける実践力の下位尺度得点

次に、7つの省察パターンによって保育実践力の下位尺度である「生活環境の理解力」「子ども理解に基づく関わり力」「環境構成力」「実践力合計」の得点が異なるかどうかを検討するために1要因の分散分析を行った。分散分析の結果、「生活環境の理解力」「子ども理解に基づく関わり力」「環境構成力」「実践力合計」において、群間の得点差は有意であった（それぞれ、 $F(6,427) = 14.31$, $F(6,427) = 22.27$, $F(6,427) = 14.51$, $p < .001$, $F(6,427) = 20.56$, $p < .001$ ）。各群の平均値と標準偏差とTukeyのHSD法（5%水準）による多重比較を行った結果をTable 3に示す。

保育実践力の3下位尺度得点と合計得点いずれにおいても、「省察高・全体高群」の第Ⅴクラスターが最も得点が高く、「省察低・子ども全体低群」の第Ⅲクラスターが最も得点が低かった。

先のクラスター分析結果により、省察の平均値を基に分けた省察低群・省察中群・省察高群それぞれの群内での得点差を見てみると、「生活環境の理解力」「子ども理解に基づく関わり力」「環境構成力」のいずれの下位尺度においても、「省察中・他者情報収集低群」の第Ⅶクラスターが「省察中・子ども察知低群」の第Ⅰクラスターより有意に得点が高かった。また、「省察高・全体高群」の第Ⅴクラスターが、「省察高・全体低群」の第Ⅳクラスターより有意に得点が高かった。「実践力合計」得点においては、「省察中・他者情報収集低群」の第Ⅶクラスターが「省察中・子ども察知低群」の第Ⅰクラスターと「省察中・子ども察知高群」の第Ⅵクラスターより有意に得点が高かった。また、「省察高・全体高群」の第Ⅴクラスターが、「省察高・全体低群」の第Ⅳクラスターより有意に得点が高かった。さらに、各群内での実践力下位尺度得点差をみると、第Ⅰ・Ⅵ・Ⅶクラスターから成

Table 3 各クラスターにおける実践力下位尺度得点の平均とSDならびに多重比較の結果

	I	II	III	IV	V	VI	VII	多重比較の結果（5%水準）
理解力	2.81 (0.42)	2.74 (0.58)	2.75 (0.60)	3.12 (0.42)	3.40 (0.39)	3.00 (0.41)	3.13 (0.36)	II・III・I, III・I・VI・IV・VII, I・VI, VI・IV・VII, IV・VII, VII・V以外有意
関わり力	3.07 (0.37)	2.97 (0.42)	2.76 (0.76)	3.40 (0.34)	3.60 (0.32)	3.31 (0.40)	3.45 (0.36)	III・II・I, II・I, VI・IV・VII, IV・VII・V, VII・V以外有意
環境構成力	2.90 (0.43)	2.79 (0.53)	2.60 (0.81)	3.19 (0.45)	3.52 (0.35)	3.05 (0.55)	3.23 (0.35)	III・II・I・VI, II・I, I・VI, VI・IV・VII, IV・VII, VII・V以外有意
実践力合計	2.93 (0.36)	2.84 (0.44)	2.71 (0.71)	3.25 (0.35)	3.51 (0.32)	3.13 (0.40)	3.28 (0.31)	III・II・I・VI, II・I, I・VI, VI・IV・VII, IV・VII, VII・V以外有意

各尺度得点は項目数で割った値を示した。

る省察中群では、第Ⅰクラスターの子ども察知低群と第Ⅶクラスターの子ども察知高群で、特に「子ども理解に基づく関わり力」の得点で差が大きかった。次に、第Ⅱ・第Ⅲクラスターから成る省察低群では、ともに「生活環境の理解力」の得点は同程度であるものの、「子ども理解に基づく関わり力」の得点で、第Ⅱクラスターの自己注意低群の方が第Ⅲクラスターの子ども全体低群よりも得点が高かった。

考 察

省察の下位尺度得点によりクラスター分析を行った結果、7つのクラスターに分類された。本研究では、クラスター間の相対的な比較から各クラスターの特徴を捉えるために、省察6下位尺度の平均値をもとに、7つのクラスターを省察低・中・高群の3群に分けるとともに、全クラスターの省察6下位尺度得点の平均と、各クラスターの省察6下位尺度得点との差を算出した。そして、省察の頻度が同程度である保育者にも、省察の対象やレベルで異なる特徴を持つことが見出された。

まず、省察低群では、全体平均との差の得点から保育者自身の態度や行動に注意を向けにくい群と子どもの態度や行動に注意を向けにくい群に分けられた。省察得点が最も低かった「省察低・子ども全体低群」の第Ⅲクラスターは、「子ども察知」「子ども分析」の両方において低かった。省察中群や高群では、子どもに関する省察得点が6下位尺度の中で最も高い傾向にあることから、第Ⅲクラスターに含まれる7名の保育者は、省察の際に子どもに焦点化しにくく、省察がうまく機能していないと考えられる。保育経験年数は、10.29年であり、他群に比べ格段に短いわけではない。しかし、長期にわたり自らの省察パターンを振り返らずに保育経験を重ねてきた可能性がある。その一つの要因として、在園年数の長さが考えられる。第Ⅲクラスターは、他群に比べ現園での在園年数が9.40年と最も長かった。つまり、同じ園の中で、ほとんど同じ同僚とともに保育を続けることで、自らの省察パターンを振り返りにくくなっていたと考えられる。秋田（2000）は、保育における省察に必要な視点として協働でカンファレンスを行う必要性を述べている。これは、他者との交流を通じた省察を行うことで、自分の省察パターンに気づき、修正するという循環的な過程を目指しているのである。本研究において、保育カ

ンファレンスや園内研修の程度に関する情報を収集していなかったため、第Ⅲクラスターの7名についてはあくまでも推察の域ではある。しかしながら、長期に渡り子どもに関する省察得点が低い特徴を持つ保育者には、保育カンファレンスや園内研修といった外的環境を整備することも省察をうまく機能させるには有効だろう。

次に、省察中群では、全体平均との差の得点から、子どもの態度や行動に注意を向ける程度に差がある群と他の保育者と子どもがどのように関わっているかにあまり注意を向けにくい群に分けられた。子ども察知の得点の低かった第Ⅰクラスターは、同時に自己注意も比較的低い特徴を持っていた。杉村・朴・若林（2009）の省察の3層モデルでは、子ども察知と自己注意は、知覚（気づき）レベルの1次的省察として想定されている。つまり、第Ⅰクラスターの保育者は、子どもや自分について考えていると認識しているものの、現実的に子どもや自分自身の態度や行動のどちらに対してもあまり注意が向いていないと考えられる。

省察の3層モデルでは、子どもや自分自身の態度や行動に注意を向けることで、それらに対して分析的・評価的に考える2次的省察が機能するので、第Ⅰクラスターの保育者の省察は、省察の最初の段階でつまづいており、循環的な省察が行われにくくなっている可能性がある。また、第Ⅶクラスターは、他の保育者と子どもがどのように関わっているかにあまり注意を向けにくい群であった。他者情報収集の全体平均との差で見ると、省察低群と同程度であることから、他の保育者と子どもとのかかわりに注意を向けにくい可能性がある。この群の保育経験年数は11.71年であり、保育経験を重ねると、新人の頃に比べ他の保育者や保育を参考にしくなることは、山川（2009）で示されている。しかしながら、秋田（2000）が指摘するように技術的・実践的・批判的省察が保育者の実践に必要なことから、保育経験が長くても自分以外の同僚保育者の保育に注意を向けることは重要であろう。

本研究では、省察パターンによる保育実践力の違いについても検討した。保育実践力の3下位尺度得点と合計得点いずれにおいても、省察をよく行う群ほど得点が高く、省察をあまり行わない群ほど得点が低かった。また、省察高群ほど、子どもに関する省察を行っており、このことは、上山・杉村（印刷中）が省察6下位尺

度得点を独立変数、実践力を従属変数にした重回帰分析の結果、子ども分析と子ども察知が実践力への影響が最も強かったことと一致している。さらに、省察の同程度の群内での実践力下位尺度得点差をみると、省察中群内では、特に子ども察知低群（第Ⅰクラスター）と子ども察知高群（第Ⅵクラスター）で「子ども理解に基づく関わり力」の得点差が大きかった。また、省察低群内では、「生活環境の理解力」の得点は同程度であるものの、自己注意低群（第Ⅱクラスター）と子ども全体低群（第Ⅲクラスター）では、省察中群と同様に「子ども理解に基づく関わり力」の得点差が大きかった。このことから、省察の対象や次元の違いは、実践力の中でも子どもにどのように関わるのかといった行動レベルの実践力に特に関連していることが示唆された。

以上のように、本研究の結果から、省察の頻度が同程度である保育者にも、省察の対象やレベルで異なる特徴を持つことが見出された。個人差を考慮することで、保育者の省察パターンに応じて、保育カンファレンスや園内研修における具体的な取組みを検討していくことが可能になるだろう。今後は、省察パターンが保育経験年数や現園の在園年数以外の何に起因するのかについて更なる検討が必要である。

引用文献

- 秋田喜代美 (2000). 知をそだてる保育—遊びでそだつ子どものかしこさ— ひかりのくに株式会社
- Hornáčková, V., Syslová, Z., Herciková, E., & Holubářová, E. (2014). The Levels of reflective skills of nursery school teachers. *Procedia-Social and Behavioral Sciences*, **112**, 853-860.
- 木全晃子 (2008). 実践者による保育カンファレンスの再考—保育カンファレンスの位置づけと共に深まる実践者の省察— 人間文化創成科学論叢, **11**, 277-287.
- 木村直子・橋川喜美代 (2008). 「保育実践力」尺度に関する研究—保育士・幼稚園教諭養成教員の考える保育実践力を手がかりに— 保育士養成研究, **26**, 33-38.

- Korthagen, F. A. J. (Ed) (2001). *Linking practice and theory: The pedagogy of realistic teacher education*. Mahwah, NJ: LEA. (コルトハーヘン, F. A. J. (編著) 武田信子 (監訳) 今泉友里・鈴木悠太・山辺恵理子 (訳) (2010). 教師教育学—理論と実践をつなぐリアリステック・アプローチ— 学文社)
- 溝口綾子 (2009). 新任保育者の保育実践における課題意識と省察に関する研究—保育カンファレンスの分析を通して— 教材学研究, **20**, 235-244.
- 岡花祈一郎・杉村伸一郎・財満由美子・林よし恵・松本信吾・上松由美子・落合さゆり・武内裕明・山元 隆春 (2009). 「エピソード記述」を用いた保育カンファレンスに関する研究 広島大学学部・附属学校共同研究紀要, **38**, 131-136.
- Schön, D. A. (1983). *The reflective practitioner: How professionals think in action*. New York: Basic Books. (シヨン, D. A. (2001). (佐藤 学・秋田喜代美 (訳). 専門家の知恵—反省的実践家は行為しながら考える— ゆるみ出版)
- 杉村伸一郎・朴 信永・若林紀乃 (2009). 保育における省察の構造 幼年教育研究年報, **31**, 5-14.
- 上山瑠津子・杉村伸一郎 (印刷中). 保育者による実践力の認知と保育経験および省察との関連 教育心理学研究, **63**.
- 山川ひとみ (2009). 新人保育者の1年目から2年目への専門性の向上の検討—幼稚園での半構造化面接から— 保育学研究, **47**, 31-41.
- 吉村 香・吉岡晶子・岩上節子・田代和美 (1997). 保育者の成長における実践と省察 保育学研究, **35**, 68-75.

謝 辞

調査にご協力頂きました保育者の方々ならびに広島大学大学院教育学研究科附属幼年教育研究施設七木田敦先生、中坪史典先生に心より感謝の意を表します。